

Shakespeare's Use of Conventional Ideas in *Othello*

舟 木 茂 子

Othello は非常に単純な劇だとしばしば言われる。sub-plot や主題からの脱線はなく、劇は早い速度で展開し、緊張感は終幕へ向って着実に増していく。しかしこのことは、この作品が平板で、単調であるということの意味してはいない。この作品には、数多くの思想、概念、劇作上の技巧が含まれており、それらが巧みに扱われ、有機的に結ばれている。

Othello は 1604 年に創作されたと推定されている。この時、すでに Shakespeare が劇作を始めてから 10 年以上が経過し、その間、喜劇、史劇、そして悲劇とすべての分野の作品を生み出してきた。Shakespeare は人間理解を深め、劇作上の技巧に熟達し、時代精神をよく捉み、観客の好みを熟知し、すぐれた劇作家を数多く生み出し演劇の花を咲かせていたエリザベス朝時代を代表する地位を築きあげていた。すぐれた文学者は、時代を越え、いつの世の人々にも受け入れられる永遠性を持つと同時に、彼が生きた時代を最もよく表現するものであるが、Shakespeare もその例にもれない。Shakespeare は中世以来の伝統を背負いつつ、時の動きの影響を受けながら成長してきた。演劇が、作者と観客の共同作業によって生れる物である時、劇作家は観客を大いに計算するはずである。Shakespeare の時代の演劇は、広く大衆の娯楽であった。彼らは伝統的な考えに縛られ、しかも時代の動きの中におかれ、観客としての目を養ってきた。

当時、悲劇は通例、王や王子すなわち王位に関係する者の失墜や死と、そこから引起こされる混乱を扱っていた。しかし *Othello* は、イタリアの物語、Giraldi Cinthio の *Hecatommithi* から題材を得た新しい内容の

悲劇となっている。Othello はムーア人で、異国のヴェニスで将軍としての地位を得た。彼におこる悲劇的状況は、社会や宇宙での混乱を引起すこととはない。これは当時の人々にとって目新しいものであった。この悲劇としての新しい素材が当時の観客に受け入れられるためには、ただ新しさのみでは充分でない。そのための下敷が *Othello* にはある。

Irving Ribner¹⁾ の *Othello* 論は、キリスト教と、それに深い係りのある morality play の世界から生れたものである。彼は、この作品を Christian tragedy の原型とみなしている。Iago は Vice の系統の devil であり、Desdemona はキリスト的人物としての angel で、Othello はいわゆる Everyman であるとみている。こうした宗教的立場からの解釈は、Shakespeare の作品の全てを説き明かしているとは言えないが、この伝統的な型を Shakespeare が用い、また当時の観客が意識したろうことは否定できない。そしてさらに多くの伝統的な思想や技巧を用いながら、新しい試みを加えたところに *Othello* の特徴があり、その複雑さを当時の観客は受け止め得たと言える。

Othello に織り込まれている伝統的、すなわち当時の人々によく知られた常識的な事柄の代表的なものを挙げると、1. 'the calumniator believed', 'the calumniated wife' 2. 'the battle of black (=evil=ugliness) and white (=goodness=beauty)' 3. 'appearance and reality' 4. 'disguise' 5. 'love and war' 6. 'friendship' 等がある。'the battle of black and white' は、白人 Iago と顔の黒いムーア人 Othello のぶつかり合いとなって表わされている。黒と白という対照は悪と善、醜さと美という対照も意味している。エリザベス朝人にとって、黒は醜悪で、悪を表わすものという固定観念があり、それに対する白は、美であり善であった。1 幕で美しい壮大なイメージを通して表わされる、高潔で勇気に満ちた Othello がムーア人であることを、上の伝統を下敷にして受け止めたとき、観客は irony を感じ、さらに不安と危懼が引起される。さらに白人 Iago の本質は、そ

の顔からは想像できないものであることが明らかとなる。

All black men were cruel to an Elizabethan, classed with Turks and Jews in atrocity plays. . . . The average audience would see Othello as untraditional and his expected character transferred to Iago.²⁾

すなわち伝統が逆の用い方をされている。

‘the battle of black and white’で示される黒と白，悪と善，醜さと美という contrast は，エリザベス朝人の思考方法の産物であると同時に，*Othello* の特質を物語っている。この作品には，新旧二つの相反する価値観が共存している。それは登場人物間の性格の違いを生み出している。また彼らには，公的立場と私的立場という立場上の違いがみられる。これら性格や立場の違いは，彼らが使う言葉の違い，すなわち天上的イメージと動物的で地上的イメージ，また詩的表現と散文的あるいは日常的表現の違いとなって現れ，また，感覚の世界と論理的世界の対立を生み出す。感情面では愛と憎しみの対照が際立っている。

Othello を大きく支配するものは従来の Ptolemy の秩序観である。全宇宙には天体界，地上界，人間界があり，天体界の中心は地球であり，地上界の中心は人間，人間界にあっては，国家の中心は国王である。これら間には相互関係があり，すべてを結ぶのは Nature（自然の女神）すなわち神の意志である。秩序と調和の価値観で，人間は性来善なるものとする楽天的なものである。ところが *Othello* には，これとならんで全く対照的な宇宙観，世界観，人間観がみられる。それは Copernicus の地動説，Montaigne, Hobbes, Machiavelli らの哲学，人間観を基礎にしたものである。より現実主義的な人間性悪説である。この新しい思想は舞台となるヴェニスの Duke 達にも，また *Othello* にもわずかであるが見出せるが，Iago が，その化身的人物として描かれている。自己中心的で，金銭に大きな価値観を見出し，徳に唾し，それを否定する。

He [Iago] is *homo emancipatus a Deo*, seeing the world and human life

as self-sufficient on their own terms, obedient only to natural law, uninhibited and uninspired by any participation in divinity. In addition to his animal nature, man possesses the equipment of will and reason with which to fulfill or regulate his natural appetites. He is the king of beasts And society, by the same token, is the arena of endless competition³⁾

一方 Othello は高潔にして武勇の誉れ高く、頭初、異国にありながらすべての人々から支持され、ヴェニスの将軍となり、Desdemona との新しい生活を得、すぐれた武人として認められトルコ軍を迎へ討つべくサイプラス島へ派遣される。彼は名誉と正義を重んじ、誠実で、情熱家で、人を信じやすい単純すぎるほどの善人である。それが故に、Iago の奸計に乗せられる。Othello の性格をよくつかんだ Iago の巧みな働きかけ、すなわち両者の絡み合いによって Othello は悲劇へと追いやられる。

Othello には登場人物の特異な相互作用がある。全登場人物の数は、同じ四大悲劇の一つで、この作品の前に書かれた *Hamlet* より少なくなっているが、*Hamlet* では主人公 Hamlet の劇であるのに比べ、この作品では Othello を始め、Iago, Desdemona 等、中心人物の複数化ともいえる傾向がみられる。Cinthio の物語と Christian tragedy を越える要素として、性格描写の深さがある。しばしばこの作品は Othello の性格の悲劇であると言われる。それと同時に、人間の絡み合いの悲劇でもある。Othello を取り巻く登場人物が直接、間接に彼に影響を与え、その影響と彼の性格がぶつかり合って劇は展開していく。

先に挙げた伝統的な思想や技巧がすべて、人間と人間が相対した時に生れるものであることが、我々の注意をひく。黒と白、悪と善、醜と美のテーマに ‘appearance and reality’ の問題と ‘disguise’ の技巧がからみ、一層複雑さを増してくる。これは複数の人間の存在によって、すなわち他人を意識した時に生じ、効果が発揮される。Iago の ‘spiritual disguise’ は、彼の実体を包み隠し、Othello を始め、まわりの人間達を欺く効果的

な武器となっていく。この過程は、ムーア人 Othello に抱いた観客の不安を現実のものにしていく。

5 幕 2 場で Desdemona の殺害が人々に発見され、例の 'handkerchief' が Emilia によって Iago に渡されたことを知った Othello は、スペインの剣を手に、

Here is my journey's end. (V. ii. 270)

と彼の状況を語るが、この 'journey'⁴⁾こそ Othello に起る変化の過程を示すにふさわしい言葉である。この旅の過程で引起されるのが彼の孤立である。Othello の孤立は、今日すでに多くの批評家が指摘している。

Othello's progressive isolation throughout the play is quite as clearly marked as that of Hamlet, and in some ways the total shape of this change, and its essential nature, are a great deal more so.⁵⁾

Othello は、人を信じ、他とのつながりを求めながら、他の人間達の真実を見失い、知らず知らずのうちに他の人とのつながりが切れ、現実を捉えられなくなる。Othello の孤立は他の人間を誤解するところから生れる。彼は内省的な性格ではなく、他人の動機や思惑を見出す洞察力を持たない。彼は、Iago の見せかけの 'honesty' に欺かれ、徐々に Cassio, Desdemona, Emilia の真実を見失う。彼は Desdemona の不実を信じ込むと、必死に Iago にすがりつき、自らが置かれた状況に気付かず現実から遊離する。Othello の孤立化を達成するために、Iago は巧みに他の人間を操っていく。まず Roderigo を手中に収め、Cassio を追放するのに利用する。Cassio の復職を Desdemona を通して頼ませる。その後 Cassio と Desdemona の間の不義を作り出し、Emilia をもそのために利用する。その間 Iago はうまく言葉を使いわけ、直接 Othello を攻めていく。Iago は Othello と Cassio を直接会わせまいとし、さらに Bianca をも利用して彼の計画を遂行する。Iago に動かされる Cassio の控え目な態度は裏目にで、Desdemona の従順な性格も、Othello の混乱の原因を

突き止めさせず、彼の孤立化を助ける結果になる。

人々の実体を捉み得ず現実から遊離した Othello の孤立は他の面からも示される。4幕1場で Lodovico は、Duke の手紙を携えてヴェニスからサイプラス島へ来る。その手紙は Othello にヴェニスへ還ることを命じ、その後任に Cassio を任命している。この手紙を読み Othello は顔色を変える。Lodovico の言葉に Othello の状況が良くない方向に変わったことが表わされている。

Desdemona. What, is he angry?

Lodovico. May be the letter moved him;

For, as I think, they do command him home,

Deputing Cassio in his government. (IV. i. 235-237)

かつて Othello は Cassio を副官の地位からはずし、その地位に Iago を任命した (“Now art thou my lieutenant” (III. iii. 480))。Duke からの手紙は、この Othello の処置が無効であったことを示している。公人としての Othello の力の無力さが知らされる。

Othello のこの変化は、対照的な価値観が対照的な人物のぶつかり合いとなって現れ、その結果彼の内部に愛・憎相反する感情が共存することになることでもある。この変化は、Othello と対照的な Iago に特有の表現方法が、彼に現れ始めることでも示される。相反する感情に即座に解決を与えようとする、単純で論理的思考の不得手な Othello は、逆転した論理⁶⁾を生み出し、相反する殺人と正義を「＝」で結び等しいものとする。彼は自ら真実を見出すことを不可能にする。黒と白で示される contrast と、その伝統の逆用、すなわち、黒＝善、白＝悪は、Othello の悲劇を示す図式「殺人＝正義」と重なり、それぞれの効果を高めあう。

‘isolation’ とか ‘entrancement’ の意識は、人々を悪へ追いやる動機となるものである。秩序が厳格に定められた世界観では、それぞれの人間が占めるべき場所や、適切で確固たる人物間のつながりは決められていた。我々は Shakespeare の作品に、‘isolation’ の意識が人物達を悪へと動か

す例をいくつも見出すことができる。Richard III は生れついでに醜男である。彼を取り巻く均整のとれた男女は楽しく暮らしている。彼はその中に入ることができず、また誰も彼を相手にしてくれない。そこから悪者になる決心をし、楽しみに耽る人々を敵にまわす。⁷⁾ また Aaron や Shylock では人種の違い、黒い皮膚の色が彼等がいる社会との異和感を生じさせる。Iago の皮膚の色が黒く、それにより彼が彼を取り巻く社会に敵対心を抱き、そこから遊離していたなら、彼の悪行の動機の一つになり得、しかも従来の「悪人と孤立」のパターンを踏襲したものとなる。*Othello* では伝統が一ひねりされている。エリザベス朝人の目には、孤立していく Othello は恐ろしいまでの悲劇の主人公として映ったはずである。

Othello の孤立化は、すなわち彼と Desdemona との愛と、彼と Cassio との信頼関係の崩壊である。Othello は他の人間を信じ、他とのつながりを求める。これは秩序観に裏付けされたものである。Othello と Desdemona との愛が結婚という形をとるところから劇が始り、それと平行して Othello と Cassio の信頼関係が示される。

Romantic love, thus spiritualized and exalted, dominates the values that organize the moral meaning of the play. Somewhat less prominent, but emphatically dramatized nonetheless, is another form of love, for which our best, though inadequate, word is *friendship*. It creates through Cassio the image of unselfish devotion and links him to the romantic pair by his own feeling of adulation for them and by theirs of affection and esteem for him.⁸⁾

Iago にとって愛は単なる情欲を意味し、Othello と Desdemona の魂の結びつきに示される愛は、理解し難く憎しみの対象である。

To the kind of love existing between hero and heroine, supplying the bright ideal of the play, the ancient is the dark countertype, the adversary.⁹⁾

Othello にとって、Desdemona は理想の世界を象徴している。彼女は単

なる恋人、妻というだけでなく、美と善の化身であり、彼の全存在の支柱である。Iago はこの Othello の前に立ち塞がり、彼等を引き離そうとする。また、Othello と Cassio の間の信頼関係すなわち ‘friendship’ も、Iago の憎しみの対象である。それを壊し彼と Othello の間に見せかけの ‘friendship’ を作り出す。

Iago によって Desdemona に対する疑いを持たされた Othello は、次第に彼女を愛したことを後悔し始める。Iago に対する信頼と Desdemona への愛情は、Othello を混乱させる。この ‘love’ と見せかけの ‘friendship’ の共存は、Othello にいずれか一方の選択を迫り、¹⁰⁾ Desdemona への愛情を消し去ることができないまま、Iago との結びつきを選ばせる。Othello と Iago の間に見せかけの ‘friendship’ が、Othello の価値観の象徴である彼と Desdemona との愛の位置を奪い、両者の愛を破壊していく。醜さと悪の権化である Iago と結びつき、Othello が、自分の顔の黒さや醜さを意識し始めると、観客にも改めてそれが印象づけられ、従来の black=ugliness=evil という図式が蘇ってくる。

‘love’ は反対要素を結びつけ、harmonize するものである。ところが Shakespeare は *Othello* で、‘love’ に破滅的性格を持たせている。17 世紀へと時代が移り、次第に社会は暗さを増した。政治上の不安や新しい思想の影響により、理想主義的人間観に雲がかかり始め、人間の暗い面が引き出されてきた。文学や演劇にもその影響は大きかった。Shakespeare の作品の展開も、こうした時代の推移と無関係ではない。初期の悲劇 *Romeo and Juliet* では、愛にすべてのものに優先する力が与えられているが、*Othello* では、愛の理想は破られ、地上的愛は破壊される。

‘love’ と深い係りのある ‘jealousy’ はこの作品の重要なテーマの一つである。‘jealousy’ については色々な考察、意見がある。Lily B. Campbell は、*The French Academy* と Varchi の *The Blazon of Jealousie* を取り入れ、エリザベス朝の ‘jealousy’ 観を説き、それを土台に *Othello* 論

を展開している。彼は、

Jealousy was, in the thinking of the Renaissance, . . . a derivative or compounded passion. It is a species of envy, which is in turn a species of hatred.¹¹⁾

と言っている。さらに 'jealousy' は 'love' に対立するものであるが、しばしば愛から生じ、'distress', 'grief', 'pain' をもたらし、さらに 'hatred' としての面は、'anger' や 'revenge' を生み出すとしている。¹²⁾ Irving Ribner は *Othello* での 'jealousy' を、

. . . an aspect of the deadly sin of envy, the antithesis of love which springs from the perversion of love by fear.¹³⁾

と定義している。一方、love—jealousy—handkerchief のトリックと並べてみたとき、しばしば特に喜劇でみられる「愛を促進する 'jealousy'」が意識される。Shakespeare は、この二つの対照的な伝統を意識し、巧みに導入しているといえる。*Othello* では、'jealousy' は愛を破滅へ導く否定的な暗いものになっているが、これは Campbell や Ribner 等が指摘している 'jealousy' と「愛を促進する 'jealousy'」の逆用があって、より一層効果的となり、観客により新しい複雑なものとして訴えた。

handkerchief のトリックは、ring のトリックと共に、happy ending を導く働きをもつものとしての使われ方がある。ところが *Othello* では、Iago が *Othello* を動かす大事な道具として使われる。すなわち逆に用いられており、「愛を促進する 'jealousy'」の逆用と並ぶものであり、新しい悲劇を生み出す大きな役割を担っている。

このように *Othello* には、数多くの伝統的な思想や技巧さらに時代の動きが取り入れられている。これは作者と観客の共有財産である。作者の意図を伝統的な、あるいは当時の人々に共通した思想や意識、文学や演劇についての知識を利用して表現すれば、それはより確実に伝えられ、観客を劇に参加させることを容易にする。この作品では、それらの伝統的なもの

は、時には観客の期待通りに提示され、時には彼らが予期せぬ形態や内容となり、しかも互いに密接に係り合い、効果的に用いられている。それによって、Shakespeare は伝統の多用から生じる陳腐さを取除き、しかも dramatic irony を生み、緊張感や悲劇性を強めている。これらの素材は有機的に結ばれ Shakespeare の人間理解の深さと合わさり、新しい複雑な劇となっている。この劇は上演後直ちに大評判となったことが伝えられている。

Othello was performed at court on 1 November 1604; it captivated the popular stage, where ever since it has been central to the Shakespearian repertory.¹⁴⁾

Othello は Shakespeare の円熟を示すと同時に、観客の円熟をも示している。

注

Text は Alice Walker & John Dover Wilson (ed.), *Othello*, Cambridge U. P., 1957 を使用した。

- 1) Irving Ribner, *Patterns in Shakespearian Tragedy*, London, Methuen & Co. Ltd., 1960.
- 2) M. C. Bradbrook, *Shakespeare and Elizabethan Poetry*, Harmondsworth, Middlesex, Penguin Books Ltd, 1964 (originally published in 1951), p. 89.
- 3) Bernard Spivack, *Shakespeare and the Allegory of Evil*, New York, Columbia U. P., 1958, p. 424.
- 4) morality play の主テーマは、Evil と Good の間をさ迷う Everyman の life-journey であり、Shakespeare は当然これを意識したろう。Ribner, *op. cit.*, を参照。
- 5) John Holloway, *The Story of the Night*, Londno, Routledge & Kegan Paul, 1961, p. 51.
- 6) これについての私見については、拙稿「Othello の ambivalence」調布学園女子短期大学「紀要」第五号を参照されたい。
- 7) But I, that am not shap'd for sportive tricks,
Nor made to court an amorous looking-glass;

I, that am rudely stamp'd, and want love's majesty
To strut before a wanton ambling nymph;
I, that am curtail'd of this fair proportion,
Cheated of feature by dissembling nature,
Deform'd, unfinish'd, sent before my time
Into this breathing world, scarce half made up,
And that so lamely and unfashionable
That dogs bark at me, as I halt by them;
Why, I, in this weak piping time of peace,
Have no delight to pass away the time,
Unless to see my shadow in the sun
And descant on mine own deformity:
And therefore, since I cannot prove a lover,
To entertain these fair well-spoken days,
I am determin'd to prove a villain,
And hate the idle pleasures of these days.

(*Richard III*, I. i. 14-31)

- 8) Spivack, *op. cit.*, p. 422.
- 9) *Ibid.*, p. 426.
- 10) Othello と Cassio の間の 'friendship' と Othello と Desdemona との間
の 'love' は調和し、衝突するものではなかった。
- 11) Lily B. Campbell, *Shakespeare's Tragic Heroes*, New York, Barnes &
Noble, Inc., 1960 (originally published in 1930), p. 148.
- 12) *Ibid.*, pp. 148-149.
- 13) Ribner, *op. cit.*, p. 94.
- 14) M. C. Bradbrook, 'Shakespeare the Jacobean Dramatist,' *A New Com-
panion to Shakespeare Studies*, Cambridge U. P., 1971, p. 145.